

国語 一一一	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (竹取物語)	名前	年	組	番
-----------	------------------------------------	----	---	---	---

解説

一 現代語訳

今ではもう昔のことだが、竹取の翁おきなとよばれる人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつこといった。

(ある日のこと、)その竹林の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思っ
て、近寄って見ると、筒の中が光っている。それを見ると、(背丈)三寸ほどの人
が、まことにかわいらしい様子で座っていた。

二 竹取物語 解説

「竹取物語」は仮名文字で書かれた日本で一番古い物語である。成立年代ははっきりしないが、十世紀前半の成立と言われている。作者も分からない。

三 あらすじ

竹取の翁は、竹の中に三寸(約九センチメートル)のかわいい女の子を見つけ
おうな
媼と大切に育てた。翁がその子を見つけてから、取る竹の中に黄金が入ってい
ることが多くなり、瞬く間に富豪になった。またその子は三ヶ月ほどで輝くばか
りの美しい娘に成長し「なよ竹のかぐや姫」と名付けられた。

世の男達は、何とかかぐや姫を妻にしようと殺到した。中でも五人の貴公子が
熱心であった。また帝もかぐや姫に求婚するが全て拒否してしまう。

そして八月十五日、かぐや姫は月世界にかえってしまう。

国語 一―二	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (平家物語)	名前	年 組 番
-----------	------------------------------------	----	-------

解説

一 現代語訳

祇園精舎の鐘の響きは、万物流転の常ならぬ世のさまを伝え、白々と散る沙羅双樹の花の姿は、栄える者の必ず滅びゆく道理を告げる。権力におごる者の運命は、春の夜の夢のようにはかなく、武に強い人の身の上もまた、ついには消えうせること、ひとえに風に吹き飛ぶ塵のようなものだ。

二 平家物語 解説

「平家物語」は、平家一門の栄枯盛衰を描いた軍記物語。平清盛をはじめとする平家一族がやがて源頼朝や源義経を中心とする源氏一族との戦いに敗れて滅んでいく様を描いたもの。成立年代は十三世紀半ば（鎌倉時代）といわれている。作者はさまざまの説があるが、いろいろな人によって書かれ、それが世にひろがっていったのであろうという説が有力なようだ。

三 あらすじ

平清盛が太政大臣となり権力を握り、平家一門は絶大な勢力を誇るようになる。しかしあまりのおごりぶりに人々は平家に反感を抱くようになる。やがて源氏方が相次いで兵を挙げ源平の戦いが始まる。その後平家は壇ノ浦の戦いで源義経に破れ滅亡する。

壇ノ浦で入水した清盛の娘建礼門院徳子だが、救助され大原寂光院で一門の冥福を祈る。建礼門院徳子の死で物語は終わる。

国語 一―三	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (枕草子)	名前	年 組 番
-----------	-----------------------------------	----	-------

解説

一 現代語訳

春は明け方。だんだんと白んでいく山ぎわが、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている(のは風情がある)。
 夏は夜。月のころはいうまでもないが、やみもやはり、蛍が多く飛び交っている(のがよい)。
 また、ほんの一、二匹ほのかに光っているのも趣がある。雨などが降るのもいい。
 秋は夕暮れ。夕日が差して山の端にとても近づいたところに、鳥がねぐらへ行くというので、三、四羽、二、三羽などと飛び急ぐことまでもしみじみとしたものを感じさせる。まして、雁などが列を作っているのが、たいそう小さく見えるのはたいへんおもしろい。日がすっかり沈んでしまつて、風の音、虫の音など(がするのも)、これもまた、いいようもない(ほど趣深い)。
 冬は早朝。雪が降っているのは、いうまでもない。霜が真つ白なもの、またそうでなくても、たいそう寒いときに、火などを急いでおこして、炭を持って(廊下などを)通つていくのも、たいへん似つかわしい。昼になつて、(寒さが)だんだん緩んでいくと、火桶の火が白い灰ばかりになつて、見劣りがする。

二 枕草子 解説

「枕草子」は平安時代中期(一〇〇一年頃)に成立した最初の随筆文学である。
 当時の有名歌人清原元輔の娘清少納言によつて書かれた。清少納言が一条天皇の中宮定子に仕えた、約十年間の宮廷生活で見聞きしたことを歯切れの良い文章で書いている。長短さまざまな作品から成り、全部で三百の章段(まとめ)から成っている。

三 「枕草子」のいわれ

「枕草子」のあとがきによると、ある時中宮定子の兄・藤原伊周が定子に紙を差し上げた。その時定子に「何を書きましよう。」と相談された清少納言が「枕にしましよう。」と答えると定子がその紙をくださった。そこで清少納言はその紙に次々にいろいろなることを書いていった、とある。なお「草子」はとじ本のことである。

国語 一―四	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (おくの細道)	名前	年 組 番
-----------	-------------------------------------	----	-------

解説

一 現代語訳

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている。一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを取って老年を迎える馬子などは、毎日毎日が旅であって、旅そのものを自分のすみかとしている。(風雅の道に生涯をささげた)昔の人々の中にも、旅の途中で死んだ人が多い。わたしもいつのころからか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あてのない旅に出たい気持ちが出てやまず、(近年はあちこちの)海岸をさすらい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに(帰り)蜘蛛の古巣を払って(住んでいるうちに)、次第に年も暮れ、新春ともなると、霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えたものだと、そぞろ神が乗り移ってただもうそわそわとさせられ、道祖神が招いているようで、なにも手につかないほどに落ち着かず、股引の破れたところを繕い、道中笠のひもを付け替え、三里に灸をすえる(など旅の支度にかかる)ともう、松島の月(の美しさ)はと、そんなことがまず気になって、今まで住んでいた庵は人に譲り、杉風の別荘に移ったのだが、草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
(元の草庵にも、新しい住人が越してきて、わたしの住んでいたころのわびしさとはうって変わり、華やかに雛人形などを飾っている。)
表八句を、(門出の記念に)庵の柱に掛けておいた。

二 おくの細道 解説

「おくの細道」は江戸時代(一六九四年頃)に成立した紀行文学である。
松尾芭蕉によって書かれた。門人曾良と共に、江戸深川から北関東・東北・北陸を経て、大垣から舟で伊勢へ向かうまでの旅を描く。旅程二四〇〇キロメートル、一五〇日を越える旅であった。

三 芭蕉は忍者？

旅程ですが、旅の総日程が約一五〇日にもかかわらず、総移動距離はなんと約二四〇〇キロにも及びます。計算すると二四〇〇キロ÷一五〇日で、一日にすると平均一五キロ程度なのですが、まったく移動をしなかった日もあり、かたや一日で五十キロ以上も移動している日もあるのだそうです。江戸時代の標準的な一日の行程はおよそ八里から十里強(約三二〜四〇キロ)らしいので、当時では壮年に差し掛かる年齢の四五歳で出発した松尾芭蕉にはハードなスケジュールだといえます。そんな一般人離れた体力などから、「松尾芭蕉は忍者だったのではな

いか」という説があるのです。

国語 一―五	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (万葉・古今・新古今)	名前	年	組	番
-----------	---	----	---	---	---

解説

一 現代語訳

「万葉集」

春が過ぎて夏がやってきたらしい。(青葉の中に) 真っ白な衣が干してある。
天の香具山に。

東方の野にはあけぼのの光りがさし染めるのが見え、西を振りかえると月が
傾いて淡い光りをたたえているよ。

「古今和歌集」

あの方を恋しく思いながら寝たのであの方が夢に現れたのであろうか。
夢と知っていたなら目ざめなかつたものを。

「新古今和歌集」

道のほとりに清水が流れている涼しげな柳のこかげよ。ほんのちよつと休もうと思つて立ち止ま
つたけれど(あまりの涼しさに) 長くいてしまったよ。

見渡すと美しいとされている春の桜も秋の紅葉も何もない。ただ海辺の苔葺きの小屋があるだけ
の秋の夕暮れのこの寂しい景色よ。

二 三大和歌集 解説

「万葉集」

- 奈良時代とそれ以前の歌謡、和歌を集めた現存する最古の歌集
- 作者は天皇から農民にいたるまで、全国の各階層にわたっている
- 歌風は率直、素朴で男性的な「ますらをぶり」

「古今和歌集」

- 平安時代初期に成立
- 醍醐天皇の勅命により作られた日本初の勅撰和歌集
- 歌風は技巧的、理知的で女性的な「たをやめぶり」

「新古今和歌集」

- 鎌倉時代に成立
- 後鳥羽上皇の勅命により作られた八番目の勅撰和歌集
- 歌風は「幽玄(ゆうげん)」「有心体(うしんてい)」「

国語 一―六	中学校第一学年の内容 古典のリズムを味わう (論語)	名前	年	組	番
-----------	----------------------------------	----	---	---	---

解説

一 現代語訳

- 1 孔子先生がおっしゃるには「勉強したことを繰り返し考え、繰り返し行っているうちに、その道理がわかり、すらすら実行できるようになってくる。なんとよるこばしいことではないか。友達が遠方からたずねてくる。なんと楽しいことではないか。人が自分を理解してくれなくても心乱されることなく、常に道を楽しむことができる人であってこそ、本当の君子なのではないか。」と。
- 2 孔子先生がおっしゃるには、「先人が述べた学問、過去の歴史や学問の持つ意味をきわめて、そこから今にふさわしい意味が発見できるようになれば、人の師となる資格があるのだ。」と。
- 3 孔子先生がおっしゃるには、「学ぶだけで考えることをしないと物の道理は明確にならない。考えるだけで学ぶことをしないとひとりよがりになって危険だ。」と。
- 4 孔子先生がおっしゃるには、「自分が望まないことは、他人にははいけない。」と。

二 論語 解説

聖書につぐロングセラーと言われる論語は、儒教の祖である孔子とその弟子たちの話したことと行動とを、孔子の死後編集したものである。

三 論語の思想

論語の思想は、思いやり「仁」を基本として、まっすぐに生きる力(徳)を指す非常に人間味あふれたものである。知れば知るほど心が平明になり、つまらないこだわりから解き放たれる。心冴えわたる孔子の言葉は二五〇〇年以上経った今でも人々の心を冴えわたらす言葉となっている。